

マヨネーズ

「何とかしたいから、戻ってしっかりやってくれ」。1995年(平成7年)7月、食品部長の辞令を受けとった。冷凍食品部から古巣に戻

私の履歴書

伊藤 雅俊

17

る。47歳。「何とかしたい」ものとはマヨネーズだった。68年に発売したものの、キユーピーがガリバーとして市場に君臨していた。

同じ土俵で戦っては消耗戦になる。我々の商品のポジションを明確にして「味の素のマヨネーズが好きな人を

がっちりつかもう」と考えた。マヨネーズの絵を描きながら「どこにフォーカスするか」と

責任が持てない。工場側も「日付管理が厳しくなり負担が増える」と取りつく島もなかった。

「何とかしたいから、戻ってしっかりやってくれ」。1995年(平成7年)7月、食品部長の辞令を受けとった。冷凍食品部から古巣に戻

え、思い切って「味の素」を使うのもやめようと思った。クノール食品の役員会で試食が始まる。ある監査役の発言で会議室が凍った。「私は反対だ。これまでの商品と違うと言えるのか。失敗したら誰が責任を取るのだ。私はハ

古巣へ難しい卵交渉

素材と気迫で賛成勝ち取る

だつて分かる。

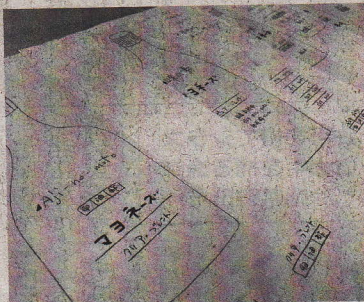
まず鮮度の向上から始めたいと評価してくれることがた。調査したところ、消費者が承認できる卵の鮮度は採卵3日以内だと分かった。そこで「3日以内の卵だけ使えば商品力に差がつく」と考えて商品開発を進めた。ところが養鶏会社や製造を担当するクノール食品に依頼すると「難しい」との返事ばかり。

養鶏会社の言い分は「供給

シも変えたほうがいいと考

と明らかに味が変わり、おいしいと評価してくれることがわかった。熟成酢を使うことで二層、味が引き立った。「原料の品質がおいしさを作ることを消費者に理解してもらったため、ブランド名をつけることにした。選んだのが「ピュアセレクト」。鮮度がよく純粋な素材を選んだという意味を込めた。パッケージも変えたほうがいいと考

賛成してくれた。



マヨネーズの絵を描きながら商品開発を考えていた

最後の稲森俊介社長が「これで行こう。頑張ってくれ」とゴーサインを出す。クノール食品の社長からはこんな言葉がかげられた。「勇気があるね。褒め言葉と受けとった。勇気とは無茶をすることなく、情報を積み重ねて判断する力だと思ってる。そこまでいくと自信がつき腹も据わる。ピュアセレクトの発売日が近づいてきた。(味の素会長)

次の関門は味の素の経営会議だ。やはり横やりが入った。「反対ではないが、また同じような提案をしてきたのか」と一人が意見を述べた。「素材の鮮度と質を大切にすることを選ばれる理由です。全く別の商品です」。考えに考え抜いた自信作だ。これまでの失敗を糧によりよい商品が生まれれば、その失敗は大成につながる。そんな気持ちでいた。